

# 公園をみる・観る

= アサギマダラ in ふれあいまつり =

10月30日(日)、この日公園は早朝から人の声が飛び交っていた。第7回ふれあいまつりの日。天気もよし、準備も万端整って来園者を迎える気持が漲る。9時、簡単なオープニング行事の後まつりが始まった。工作コーナー、ゲームコーナーの子どもたちの笑い声、鳥の巣箱作りで聞こえる金槌の軽快なリズム音、それらを包み込むように焼き芋、コーヒーの芳しい香り、うどん出汁の美味しそうなにおいが漂い、まさに心が満される秋祭りの情景だ。



突然「アサギマダラだ」と誰かの声がした。見ると玄関横の壁際に植えられたフジバカマの周囲で華麗なチョウが1羽ゆったりと翅を動かしている。どこに留ろうかと迷ってでもいるかのように、フジバカマの周りでふんわりと漂うように、浮かぶように(アサギマダラは他のチョウのようにヒラヒラとの擬音で表現される飛び方はしない)。人々のざわめきの中、やがて静かに着地いや着花した。その様はまつりの風景の中に同化したように静かであった。アサギマダラとしてはフジバカマのもつアルカロイド



を含む蜜を吸う為に一休みしていたのだろう。アサギマダラは幼虫の頃から、やはりアルカロイドを含むガガ芋科のキジョランの葉を食す。アルカロイドを体内に取り込むことにより自らに毒性を持ち、外敵から身を守っているとのこと。またアサギマダラのオスはアルカロイドから性フェロモンを作りメスにアピールするらしい。そう言えば人間もフジバカマの花を乾燥させると桜餅のような香りがするとして、貴族たちは湯に入れたり衣装や髪につけていたと言う話もある。人も生き物、考えることに大差ないのだ。

ところで、アサギマダラはタテノチョウ科アサギマダラ属で、日本で見られる移動(渡りを)するチョウの一種である。春から夏、標高1000m~2000mの涼しいところで発生したアサギマダラの多くが南西諸島・台湾あたりまで南下する。南西諸島で幼虫越冬した彼らは、春の羽化後にまた北上し日本の涼しい山岳地などで繁殖する。記録によると山形県の蔵王スキー場で捕獲マーキングされた個体が与那国島の久部良岳山頂で確認された例もあるという。その距離なんと2246kmにも及びとか。翅を広げても体長10cm、体重0.5g足らずの決して大きくないチョウだが気圧や風の状態を感じとりながら海を渡って行く。

途中の島々を経由しながら年に2度1000km以上も移動し続けるアサギマダラたち。すごいなあ。

そのうちの1羽が公園のまつりの風景に溶け込んでいた。これからまだまだ旅は続くのだろう。いろんなところのいろんな「まつり」を楽しみながら南西諸島にたどり着くのだ。北上の季節を迎えたらまたこの公園の「春まつり」に来てくれるといいなあ。

そして訪ね歩いた各地のまつりの面白い話を聞かせてくれないものかと夢想する。(土×土)